

大学生協の分岐点

——協同主義と連合主義・再論——

大学生協連会長理事 庄司興吉

1 韓国大学生協にみる日本大学生協の「未来」

前回の理事会以降、2つの会議がありました。

1つは韓国での日韓マネージャー会議（専務理事と実務責任者の会議）です。ソウルに行き、セジョン（世宗）大とソウル大を訪問、それからクァンジュ（光州）に行って、チョンナム（全南）大とチョソン（朝鮮）大を訪問し、チョソン大で懇談会、そのあとプサン（釜山）に行き、キョンボク（慶北）大、プサン大で生協を訪問、という忙しいスケジュールでした。移動が多く、疲れました。韓国には、現在 22 の大学に大学生協があるということです。ソウルでは、日本の連合会のようなものをつくろうとして特別委員会が組織されており、18 大学生協が所属しているということでした。ソウル大は、入っていないようです。

チョソン大生協は、22 大学のなかで規模も大きく、もっとも組合員も多く、日本の大学生協に近い、生協らしい生協でした。それと対照的に、最後にうかがったプサン大の生協は、外部企業との提携を導入しており、もっとも新しく、もっとも組合員の少ない生協の1つで、生協らしく変えるために後任の方がたいへん苦勞されていました。

それらを見て感じたことですが、韓国では 1989 年に大学生協をつくる動きが始まり、本格的に作られたのが 2000 年、韓国自身が経済発展したあとで設立されたために、非常に困難な状況に直面しているようでした。日本の大学生協がそうであったように、自分たちで生協をつくらなければ何もないというような状況でないために、大学生協をつくり運営していくのがかえって困難なのだと思います。遅れているという意味では、日本の大学生協の後を追っているように見えるのですが、ソウル大、プサン大のように、生協が企業を呼び込んで任せるような形になっていて、生協らしさが失われてきている。

かつてはアメリカにも生協らしい大学生協がありましたが、今では同じようになっているのに似ています。韓国の大学生協は、日本よりも速いスピードでそういう方向に動いている。グローバル化の時代に、ぼやぼやしていると、日本の大学生協もこういうふうになっていくことになりかねない、という印象を持ちました。その意味ではかえって、韓国の大学生協は日本のその「未来」であるかもしれないのです。

2 OB 懇談会にみる日本大学生協の起源

その後のことです。日本の大学生協連の 50 周年にあたり過去を振り返り、歴史の編纂に備えるためということで、大学生協連結成当時の皆さんにお集まりいただき、その当時の話をうかがって残しておこうという動きがあつて、その2回目の懇談会がありました。10 人ほど、1950 年代から 60 年代の大学生協連づくりに関わった方がたに、集まっていたきました。

そのなかで、いくつかはっとさせられたことがありました。1つは「無私の連帯」という言葉で、二代目大学生協連専務理事田中さんの言葉です。もう1つは、名古屋を中心にしたこの時期活躍された田辺さんのもので、「連帯の力」という言葉。これらの言葉で、日本の大学生協の基礎がどのようにつくられたのか、よく分かります。

初代大学生協連の専務杉本さんは、もっと具体的に語ってくださいました。「片道切符

で出かけ、寮に泊まらせてもらい、食べさせてもらって、帰りの旅費をカンパしてもらって帰ってくる。そんなふうにしてオルグを続けた」というのです。大学生協間の連帯がどのように構造化されていき、日本の大学生協のいわば原構造がどのようにつくられたのかがよく分かりました。

当時は、学生運動が盛んな時期ですので、生協は政治的には二次的なものとみなされていました。しかし、生協は、政治を中心に華ばなく活動していた学生運動とは違って、事業をおこなう協同組合であったわけで、そのことによってかえって、1960年代末における学生運動の爆発・衰退のあとも拡大・成長を続けてきたのです。

韓国での懇談のなかでも出たのですが、大学には生協があるのが当たり前、大学に入ったら生協に入るのが当たり前、という通念あるいは雰囲気がこうしてつくられていった。これが韓国側の人たちには、なかなか分かってもらえないし、うまく伝わらないのです。日本の戦後史を経験し、なんらかの形で体験していない人にはなかなかうまく伝わらないのだ、ということを懇談会のなかでも感じさせられました。

3 生協職員の成長と事業連合の形成

こういう時期に学生時代を過ごし、生協活動をした人が生協の職員になり、大学生協の原構造を維持しながら拡大していくという形で、1960年代から70年代にかけての大学生協の拡大・発展がおこなわれていったのです。それを基盤に、大学から出て、都市生協や市民生協に参加していった人たちが、今日の巨大な日生協の基礎をつくっていくということも起こったわけです。

大学に残った人たちのあいだでは、60年代の末に全共闘運動などで学生運動が盛り上がり、70年代初めに衰退していくなかで、生協は政治に巻き込まれ、乱闘事件のようなこともありました。しかし、そういうことを乗り越えて、地域ごとに事業連合が形成されていった。そして、学生運動が衰退していくなかでも、事業を継続しようとし続けたことで、大学生協は拡大の基礎を築いていったのです。

この辺のことを、すなわち60年から70年代に事業連合が各地で作られていった経過を、OB懇談会などの成果も踏まえながら、きちんとした資料として残していかなければならないと思います。この時期のことですから、各地でいろいろな大学生協が活躍していて、地域の政治的事情を反映して事業連合の構造はかなり複雑なものとなり、それらが今日の課題にもなっていると思うからです。

その後福武元会長が現れて、学生中心の生協から大学の全構成員の関わる生協への方向がはっきり出され、その方向に大学生協は発展してきました。そして、事業を中心に生き残り、事業連合をつくってその基盤を固めていく過程で、生協職員も育ち、学生および教職員との関係で重要な役割を果たすようになってきたのです。

学生や教職員は、生協が大学にあるのは当たり前で、それを利用するという観点が先立つのですが、生協運動の初心を忘れがちな学生・教職員を生協職員がオルグして原構造を維持する役割を担ってきたわけです。この面が悪く出て、生協職員が生協を自分たちの会社のように考えて行動すると、問題が起こったりします。しかし、全体としてみれば、生協職員が、大学生協の協同組合としての性格を支えて来たのです。

こうして生協職員が表にでると、大学も、どうしても生協を業者の一種のように思ってしまう。この傾向を押さえるためには、学生と教職員が生協職員と一緒にあって、理事会を有効に働かせ、大学との折衝などもおこなっていく必要があるわけです。組合員全体に生協が協同組合であることの自覚がなければならないということでしょう。

4 法人化以後の情勢

そのうえで今日の情勢ですが、グローバル化の流れが、大学のなかにも入ってきていて

これに全面的に巻き込まれる状況になってきています。大学の事業化の面が強くなり、イメージアップ、収益アップなどのために外部企業を導入することが盛んに行なわれるようになってきています。事業的な観点から、生協にもさまざまな要求をしてきています。

また、これもグローバル化の一環ですが、生協法改正で共済事業を分離せざるをえなくなってきました。大学の事業化に伴ってキャンパスの市場化に対抗せざるをえなくなっているかたわらでは、共済といっても保険なのだから、保険のグローバルスタンダードにしたがってきちんとするという要求に応えていかななくてはならない。今までの大学生協のやり方からすると、これらはマイナス要因なわけで、二重のマイナス要因を克服して今後どうやって生き残り発展させていくかが課題になってきている。このことについては、前回東京での会議で、「マイナスを乗じてプラスにする」という形でお話しさせていただきました。

これらに加えて最近の状況としては、アメリカ発の金融危機が全世界に波及してきています。アメリカは、多くの人が、それだけの経済的実力がないにもかかわらずクレジットカードを何枚も持っているような国で、もともと過剰に信用が膨張していた国です。そこにブッシュ政権になって9.11が起り、アフガニスタン戦争・イラク戦争で多額の戦費を浪費して膨張していた経済の内容がますます薄弱となり、サブプライムローン問題をきっかけとして金融危機が顕在化してきたのだと思います。グローバルなテロリズムへの対処を誤った、史上もっとも愚かな大統領は、最近テレビに映るのを見てみると、任期切れをまえに楽しそうに振る舞っていますが、

すでに起こった金融危機がどう波及してくるのか、われわれとしてはどう対応するのかを考えていかなければならないでしょう。先進国・新興国を問わず世界経済を支える主要国は、ドルを支えるために多額の政府支出をせざるをえなくなっているのです。その影響はいろいろな形で日本の経済の全体に及び、やがて大学生協にも及んでくるでしょう。

それに加えて、食糧危機の顕在化もあります。金融危機と根は関係ないように見えるのですが、実際には一体化して起こってきていますので、こちらのほうが大学生協とももっと関連が深いのではないかと思います。最近、NHKが2日に渡って特集を組みました。アメリカの農業が過剰生産で苦しんでいたのが、世界の食料をアメリカの農業に結びつけ、アメリカの農業への依存をつくりだしてきた。そのうえで、つまり全世界の食糧を自国農業に依存させうえて、穀物のエタノール燃料化などで価格をつり上げ、世界中に食糧危機を引き起こしてきている。テレビに映し出されたエジプトでのパン争奪の状況などを見ると、すごい時代に入ってきていることがよく分かります。市場主義に乗り、アメリカ食糧への依存を深めてきた諸国は、そのツケを払わなければならない状況になっているし、ますますなっていくでしょう。

また他方では、世界中に中国産食糧の安全生についての不安が広がってきています。これらのことで国産国消への動きを各国が強めるとしても、その効果が現れるまでには相当な時間がかかるでしょう。それまでに、食料不足がいろいろな形で頻繁に起こるかもしれません。日生協でも対応を考えていると思いますが、われわれ大学生協としても、いろいろなケースを考え、対応できるような姿勢を強化していくことが重要になるのではないのでしょうか。

5 協同主義と連合主義の強化を！

そのために、どうしたらよいか。

私は以前から、協同主義と連合主義をうまくかみ合わせて、大学生協の発展を図るべきだと言ってきました。協同主義の原型は、日本の大学生協がつくられた時期にできあがった、いわば原構造のようなもので、大学生協の文化とも言うことができます。「大学に生協があるのは、当たり前。大学に入れば、生協にはいるのは当たり前」というのがこの文化

で、大学生協は長いことこの原構造に胡坐をかいてきました。国立大の法人化以降、それが樂觀できない状況になってきたのです。したがってわれわれは、大学生協の創成期につくられたこの原構造の意味をたえず考え直して、グローバル化にあわせてわれわれの文化をくり返し更新していかななくてはならないのです。

具体的には、組合員にたいする働きかけが必要です。とくに日本の大学生協は組合員の大半が学生なので、各地の学生委員会に役割を発揮させ、生協への学生参加を活性化させていく方法を考えていかなければなりません。それが協同主義強化のアルファにしてオメガであるということを、たえず想起しなければならないでしょう。

つぎに、生協ですから、地産地消ができる場合にはそれを積極的に取り入れていく必要があります。地産地消が、必ずしも安全というわけではありませんが、ローカルな市場の利用とグローバルな大市場の利用との組み合わせを、積極的に考えていかなければなりません。これをやるためには、全国各地の大学生協のもっとも効果的な連合を考えなければなりません。そのために連合主義の強化が第二の課題になるわけですが、「無私の連帯」や「連帯の力」を先輩たちに語っていただいたことをくり返し想起し、グローバル化の時代に合わせてそれらを再生させていく方法を考えていかななくてはならないと思います。

具体的には、連合会があいだに入って、地域主義と大市場とをもっとも効果的に媒介する方法を考えていく。これからは日本も、全体としては国産国消を強化する方向で進んでいかざるをえないでしょうし、そうなるでしょう。連合会としては、そういう視野を持ちながら、地域と大市場とのかみ合わせ方を考えていくことになると思います。そのために、連合の形態を分かりやすく、すっきりとした、費用のかからないものにしていく。それが重要になってきています。そのための案を、われわれは討議しつつけてきているし、今日も出されると思います。

戦後期に形成された日本の大学生協文化。文化は、社会学その他では議論されてきたことなのですが、文明と区別して規定すると、物質文明にたいする精神文化です。物質文明を真似するのは比較的楽ですが、精神文化は受容するのはむずかしいし、伝えるのもむずかしい。韓国でも痛感したことです。今年の12月のアジア地域の会議でも、日本の文化としての大学生協をうまく伝えられないかと思っていますが、おそらく容易ではないでしょう。しかし、ポストコロニアル期のアジアでは、大学はとりわけ重要で、大学の生活を支えて行く生協の役割も重要です。日本の大学生協の文化を伝えていくことを、むずかしいけれども考えていかなければならないと思っています。

そうした視野をもって、共済分離は決まったことですからできるだけよい形で実現していく、連合のあり方ももっとすっきりした効率的な形態にしていく。そのために今後ともご協力をお願いしたいと思います。以上をもって、私の問題提起とさせていただきます。

(0810 地域センター会長会議での問題提起、090820 完成)